

マロ塚古墳出現の背景

The Background to the Appearance of the *Marozuka* Tomb

杉井 健

SUGII Takeshi

はじめに

①合志川中・下流域左岸の古墳と遺跡

②古墳時代中期における合志川中流域西部左岸の役割

おわりに

【論文要旨】

きわめて良好な遺存状態を保つ甲冑や鉄鎌などが出土したマロ塚古墳であるが、その正確な所在地はいぜん不明のままである。しかし、熊本県北部を流れる菊池川の支流、合志川の中流域西部左岸をそのもっとも有力な候補地域とすることまでは可能である。

合志川中流域西部左岸には、いくつかの注目すべき特質が存在する。第1に、当地域にはじめて築かれた前方後円墳（高熊古墳）には管窯焼成技術導入期の埴輪が樹立され、しかもそれは畿内地域の埴輪と同じ技術体系のなかに位置付けられるきわめて精美なものである点である。第2に、合志川下流域まで含めると帯金式甲冑出土古墳が3基存在し、その基数は熊本県地域では緑川中流域に並ぶ多さである点である。第3に、大規模な円墳が古墳時代中期に集中して築かれる点である。第4に、方形周溝墓あるいは小規模な円墳が古墳時代前期から後期に至るまで連続と築造され、そのなかに朝鮮半島系渡来文化の一要素とみられる馬埋葬をとまなう円墳が存在する点である。

こうした特質は、当該地域が、古墳時代中期中葉になって、古市・百舌鳥古墳群を造営した中央政権と密接な関係をもつに至ったことを示している。これと類似の動向を示す地域には、熊本県阿蘇谷や緑川中流域、あるいは福岡県八女地域や筑後川中流域の吉井地域などがあるが、これらは古墳時代中期前葉までには有力な古墳が築かれていなかった地域である。さらに、有明海に直接面しない内陸部である点でも共通する。これらのことから、古墳時代中期中葉の有明海沿岸地域では、海岸沿いのルート以上に河川づたいの内陸ルートが重視されたこと、しかもそれは中央政権側の意図のもとに新たに整備された可能性があることを指摘した。

合志川中流域西部左岸は菊池川中流域の菊鹿盆地と南の熊本平野部を結ぶ内陸ルートの要衝であるが、マロ塚古墳に多くの武器武具類が副葬された要因の一端はまさにここにあるのである。

【キーワード】 マロ塚古墳、熊本県合志川中流域、中央政権、古墳時代中期中葉、内陸ルート

はじめに

本書第2部での報告内容からわかるように、国指定重要文化財「肥後マロ塚古墳出土品」はきわめて良好な遺存状態を保っており、今後、古墳時代中期の金工技術を考察するうえで欠くことのできない資料となることは間違いない。しかし、マロ塚古墳の正確な所在地、すなわち、マロ塚古墳出土遺物がどの古墳から発見されたのかについては明らかにすることができなかった。このことは、古墳総体としてマロ塚古墳を評価することが事実上不可能であることを意味する。

このような現状ではあるが、第2部第2章で検討されたように、マロ塚古墳の所在地をある程度の範囲にまで絞り込むことは可能である。断片的な情報をつなぎ合わせるしかないが、熊本市植木町（旧鹿本郡植木町）と菊池市（旧菊池郡^{しすい}泗水町）、合志市（旧菊池郡^{こうし}西合志町）の市境を中心とする地域がそのもっとも有力な候補地域であるとする事までは許されよう。現在の地名でいえば、熊本市植木町古閑、菊池市泗水町南田島、合志市^{わぶ}上生および^{あいおい}合生とその周辺である。

そこは、熊本県北部を流れる菊池川の支流、合志川の左岸にあたる（図1）。合志川は、阿蘇外輪山の西峰、鞍岳の西麓に発し、西流したのち菊池市と熊本市植木町の行政界付近で流れを北へ変え、菊鹿盆地のほぼ中央で菊池川に合流している。そうした合志川中流域左岸が、マロ塚古墳所在地の有力な候補地域なのである。

そこで本稿では、合志川中流域、なかでもその西半部の左岸にマロ塚古墳が所在するとの前提にたち、当該地域が古墳時代中期にどのような場所であったのかを考察したうえで、マロ塚古墳出現の背景を探ってみたい。

なお、合志川の南流部をその下流域、西流部のうち標高70～80mあたりまでを中流域ととらえておく。具体的な地名でいえば、熊本市植木町古閑周辺が中流域と下流域の境界にあたる。また、菊池市泗水町と菊池市旭志の町境付近が中流域と上流域の境界にあたり、その地点で矢護川が合志川左岸に合流している。

①……………合志川中・下流域左岸の古墳と遺跡

1 従来の合志川流域の位置付け

菊池川流域に包含するのか 合志川は、熊本県北部の主要河川である菊池川の一支流である。したがって、合志川流域は、菊池川流域あるいは菊池川中流域というくくりのなかでとらえられることが一般的である。たとえば、『前方後円墳集成』九州編において、隈昭志は、菊池川流域を一括したなかに合志川流域の古墳を位置付けている〔隈1992：pp.66-67の表1〕。高木恭二は、自身の研究が進展するたびに新たな古墳編年案を発表しており、地域区分やその名称についてもしばしば見直しを行っている〔高木1984・1990・1995・2000・2003・2008、高木・藏富士1998〕。高木は、当初、菊池川流域を下流域、中流域、上流域に分け、合志川流域をその支流域として「分離することも可能である」とした〔高木1984：p.15〕。しかし、次の論考〔高木1990〕以降、下流域と中流域に2分

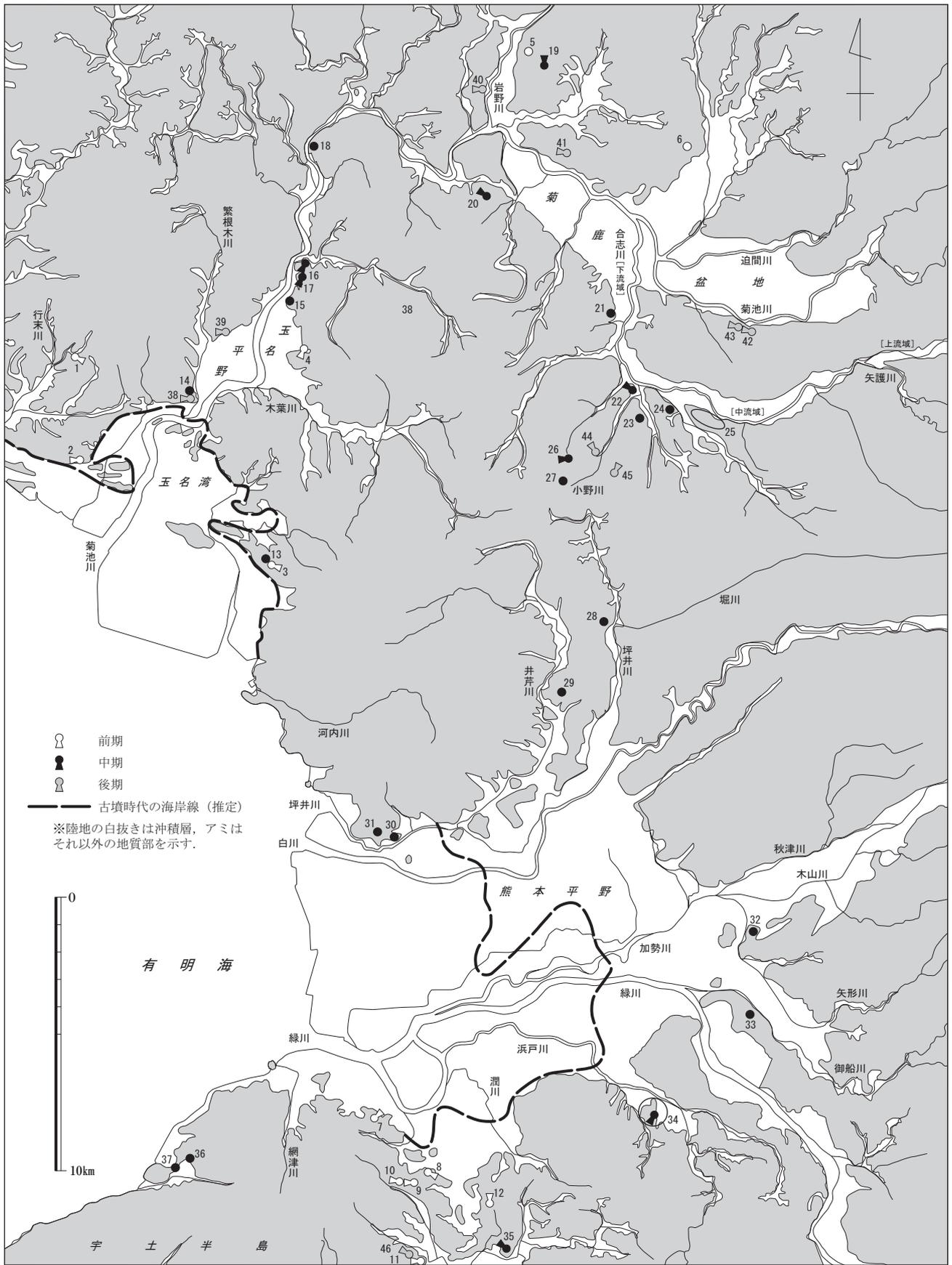


図1 熊本県北部地域の主要古墳・遺跡の分布

- 前期 1: 院塚 2: 藤光寺 3: 天水大塚 4: 山下 5: 竜王山 6: 津袋大塚 7: 天神山 8: 城ノ越 9: 追ノ上 10: スリバチ山 11: 弁天山 12: 向野田
 中期 13: 天水経塚 14: 伝左山 15: 椿山 16: 江田船山 17: 塚坊主 18: 竜門寺原1号 19: 銭亀塚 20: 岩原双子塚 21: 慈恩寺経塚 22: 高熊
 23: 上生上ノ原4号 24: 黒松1号 25: 八反田遺跡他 26: 塚園1号 27: 鬼塚 28: 羽山塚 29: 富ノ尾 30: 檜崎山5号 31: 千金甲1号 32: 井寺
 33: 小坂大塚 34: 塚原古墳群 (琵琶塚) 35: 松橋大塚 36: ヤンボン塚 37: 城1・2号
 後期 38: 稲荷山 39: 大坊 40: チブサン 41: 中村双子塚 42: 木柑子フタツカサン 43: 木柑子高塚 44: 横山 45: 石川山2号 46: 国越

するのみとなる。そして、近年では中流域を5群に分け、そのなかの一つとして合志川流域をとらえていた[高木1995・2003]。さらに、本書第4部第7章の高木論文では、菊池川中流域を11の群に区分する視点が示されたが、合志川流域にあたる旭志群、植木北群、植木南群、合志群の四つが菊池川中流域という大きなくりのなかに含まれている点は従来と変わらない。

こうした見解に対し、合志川流域を明確に分離して考えたのは、中村幸弘や木村龍生である。中村は、合志川流域を「地理的に見ても(菊池川)下流域や中流域とはやや異なる地域」(括弧内は杉井補足)であるとし「その他」の地域として取り扱った[中村1998:p.76]。木村は、菊池川下流域や中流域と並ぶ地域区分として、合志川流域を独立させた[木村2007:p.179の第1図]。

古墳動向を考察する際の地域区分の範囲は、その研究目的に合わせて大きくもなり、また小さくもなる。合志川は菊池川の支流の一つであるから、その流域を菊池川流域に含めて考える視点は十分に理解できる。しかし、後述するように合志川流域にはきわめて特徴的な様相がみられるから、とくに古墳時代中期を考察する際には、一つの独立した地域として認識する方がより適切であると考える。菊池川流域あるいは中流域のなかに埋没させてしまうべき地域ではない。

交通の要衝であること こうした合志川流域の重要性を的確にとらえ、その地域的特性を積極的に評価する視点は中原幹彦によって提示されている。中原は、菊鹿盆地を西流する菊池川から分かれて合志川沿いを南へ向かい、その支流、^{わぶ}上生川、小野川を経て分水界を越えたのち、今度は南流する坪井川を下って熊本平野へと至るルートをとくに重視し、「植木東路」と名付けている[中原2002:pp.24-26]。つまり、合志川中流域西半部の左岸は、熊本県地域北部の菊鹿盆地と中部の熊本平野を結ぶルートのちょうど中間地点に位置し、南から歩めば菊鹿盆地への玄関口に、北からはその出口に当たる。そうした主要交通路の要となる地点であることを中原はとくに強調するのである。本書第2部第2章第1節に書かれた中原の文章では、この点がさらに明確に示されている。

合志川中流域西半部左岸が交通の要衝であるという点は、私も重視してきており、熊本へ赴任して第1の調査地点に当地を選択したのもそうした理由があったからであった[杉井・檀編2003:pp.3-4]。試みに標高80mの等高線をなぞってみると、中原のいう「植木東路」のルートのみが菊鹿盆地と熊本平野をつなぐことがわかる。

しかし、交通の要衝であるとはいえ、後述するように、合志川中流域西半部の左岸に有力な古墳が築造され始めるのは古墳時代中期中葉以降である。それはなぜなのか。ここに、マロ塚古墳出現の理由も隠されていると思われるのである。

2 合志川中流域西半部左岸の中期古墳と遺跡(図2)

これまでに行われてきた古墳時代研究のなかで、熊本県地域に所在する古墳の内容は一定程度知られている。たとえば、古墳時代前期では宇土半島基部地域の向野田古墳、中期では菊池川下流域の江田船山古墳、後期では水川下流域の野津古墳群などが全国的にも著名である。これに対し、十分な情報が発信されていないこともあり、合志川流域の古墳については多くの人々が認識するまでには至っていない。むしろ、全国的にはほとんど無名に近いというのが現状である。しかし、そこには、熊本県地域の古墳時代中期を考えるうえで看過できない内容をもつ古墳が築かれている。

高熊古墳の重要性 もっとも注目すべきなのは、熊本市植木町古閑に所在する高熊古墳である



図2 合志川中・下流域左岸の主要古墳・遺跡の分布

- 1:長明寺坂1号墳 2:慈恩寺経塚古墳 3:高熊古墳 4:高熊2号墳 5:長塚古墳 6:宮ノ迫古墳 7:アブミ塚1・2号墳
 8:黒松古墳群(a:1号墳) 9:生坪塚山古墳 10:石立遺跡 11:八反田遺跡 12:八反原遺跡 13:迫原遺跡 14:上生上ノ原4号墳 15:塚園古墳群(a:1号墳) 16:鬼塚古墳 17:横山古墳 18:石川山古墳群(a:2号墳, b:6~12号墳)

(図2-3)。それは、合志川中流域西半部の西端に位置する。そこはちょうど、西流する合志川が北へ流れを変える地点の左岸にあたる。

合志川中流域(西流部)の両岸には、川面との比高差が20～30m程度の広大な台地が広がっている。右岸(北側)は花房台地、左岸(南側)は合志台地であるが、とくに合志台地の北縁は、合志川左岸に流入する小河川によって開析され、いくつかの舌状台地が北側に向かって突出する地形となっている。そうした舌状台地の先端や縁辺部に多くの古墳が築かれているが、高熊古墳も合志川の支流、夏目川と上生川、そして上生川に流れ込む小野川にはさまれた舌状台地の北縁に立地しているのである。

高熊古墳は前方部を北西へ向ける前方後円墳である。墳丘規模は72mと推定されているが[田辺1964]、墳丘裾が大きく削平されているため確定的ではなく、今後の調査が必要である。ただし、2003年度に実施された発掘調査によって、幅4m以上の周溝が鍵穴形にめぐる可能性が指摘された[西嶋編2004]。古墳の時期は、周溝埋土などから出土した須恵器器台片を根拠にすればTK208型式段階と推定されるが、これより若干さかのぼる可能性も捨てきれない。重要なのはその埴輪の内容で、Bb種およびBc種ヨコハケが施された円筒埴輪を有し、さらには家形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪片も多数検出されているのである。とくに円筒埴輪はきわめて精美なもので、畿内地域の埴輪と同じ技術体系のなかに位置付けられる[竹中2003b:p.240, 竹中2008:pp.98-99]。熊本県地域における窖窯焼成技術導入期の埴輪としてはもっとも初期のものと評価できよう。これに並ぶ内容の埴輪は、熊本県地域では、後述するように菊池川下流域の^{なごみ}和水町椿山古墳(円墳)でしか確認されていない⁽¹⁾。

加藤一郎も述べるように、熊本県地域で本格的に円筒埴輪が樹立され始めるのは、大局的にみれば窖窯焼成技術導入以後である[加藤2008a:p.237]。古墳時代前期では宇土市向野田古墳(前方後円墳)や八代市有佐大塚古墳(前方後円墳)などに円筒埴輪が樹立されるが[竹中2003a]、これらはきわめて例外的な存在であり⁽²⁾、窖窯焼成技術が導入されるまでは、熊本県地域では壺形埴輪が主体をなすと考えてよい。そうした状況のなか、畿内地域の情報を的確に反映した埴輪が高熊古墳にいち早く樹立されたのである。しかも、高熊古墳は合志川中流域西半部左岸に築造された最初の前方後円墳であるから、その出現の意義はきわめて大きい。

さらに注目されるのは、竹中克繁も指摘するように、高熊古墳のあと、当該地域には埴輪を樹立する古墳が築かれていないことである[竹中2003b:p.240]。孤立した存在であるからこそ、よりいっそう高熊古墳の存在意義が問われなければならないのである。

なお、これと対照的な状況を示すのは、上述の椿山古墳およびその後^{せいぼる}に築かれたいくつかの古墳である。椿山古墳(円墳)は、江田船山古墳などが築かれた和水町清原古墳群の南約1kmに位置し、清原古墳群とはごく小さな谷地形によって隔てられているのみである(図1-15)。上述したように、椿山古墳出土の埴輪は、高熊古墳のものと同じく、畿内地域の埴輪と同じ技術体系のなかに位置付けることができる精美なもので、窖窯焼成技術導入期のものとみなされる。この埴輪の系統が、清原古墳群の京塚古墳(円墳)、虚空蔵塚古墳(前方後円墳)、江田船山古墳(前方後円墳)、塚坊主古墳(前方後円墳)へと受け継がれていくのである。

熊本県地域において、畿内地域の情報を的確に反映して作られた窖窯焼成技術導入期の埴輪は、



図3 合志川中流域西半部左岸の円墳

出土古墳が明確なものとしては、高熊古墳および椿山古墳にしかみられない。したがって、その後の展開過程に以上のような明確な差異がある点は、両古墳が立地する地域にそれぞれ存在した在地勢力と中央政権との政治的関係を考察するうえできわめて重要である。

大きな円墳の集中(図3) 古墳時代中期における合志川中流域西半部左岸の動向を考える際には、そこに築かれた円墳を無視することはできない。とくに、マロ塚古墳を探索するうえでは、前方後円墳のみならず、円墳をその検討対象に含めることがきわめて重要であると考えている。しかし、問題となるのは、内容が明らかな円墳が存在しない点である。したがって、その築造時期も不明確なのであるが、時期が判明している当該地域の古墳や遺跡の多くが古墳時代中期に属することから、以下に述べる円墳も中期に築造された可能性が高いと想定している。

さて、高熊古墳が立地する舌状台地の東側には、上生川をはさんで別の舌状台地が存在し、その北縁に多くの円墳が築かれている。

舌状台地のもっとも西側に位置するのは菊池市^{ちようづか}長塚古墳である(図2-5、図3-1)。現状における直径は約15m、高さは約5.5mである[富田2001:p.150]。しかし、三差路の交差点に面しており、墳丘周囲が削平されていると思われるから、その規模はもっと大きくなるだろう。高熊古墳の東800mにあり、樹木がなければ互いを視認することができると思われる。

長塚古墳の東650m、舌状台地北縁のほぼ中間地点には、菊池市宮ノ迫古墳が存在する(図2-6、図3-2)。南田島菅原神社の境内にあり、現存の直径約25m、高さ約4.5mとされるが[富田2001:

pp.150-151], 印象ではもっと大きく感じる。かつて大松が倒れた際に赤色顔料が塗布された石棺が現れたらしいが〔隈 1981 : p.85〕, 現状の墳頂平坦面ではそれを確認することはできない。宮ノ迫古墳の南に隣接して、直径十数 m の小円墳であるアブミ塚 1・2 号墳があるが(図 2-7), それらのうち 2 号墳は工事によって削平され消滅したという〔吉田 2001 : p.241〕。しかし, 1 号墳は良好にその墳形を保っている。

宮ノ迫古墳の東 400 ~ 500 m, 舌状台地北縁の東端には合志市黒松古墳群があり, 6 基の円墳の存在が確認されている(図 2-8)。なかでも 1 号墳は, 現状の直径約 37 m, 高さ約 7.5 m もあり, 合志川流域の円墳としては後述の熊本市植木町慈恩寺経塚古墳に次ぐ規模を誇る(図 3-3)。1 号墳の墳丘裾の隣接地において, 凝灰岩製の箱式石棺 1 基が確認されている〔山下編 1994 : p.7〕。

ここまで述べた長塚古墳, 宮ノ迫古墳, アブミ塚 1・2 号墳, 黒松古墳群は, 同じ舌状台地の北縁に並んでいるから, 一つのまとまりを形成していたとみなすことも可能である。とくに, 宮ノ迫古墳, アブミ塚 1・2 号墳と黒松古墳群については, それらが立地する地形の連続性を重視すれば, 一体のものとする方がよいように思われる。

さて, 長塚古墳から黒松古墳群までが並ぶ舌状台地の東側には, あいだに塩浸川^{しおひたし}をはさんでさらに別の舌状台地が広がっている。それは南東から北西へと伸びる台地で, 北縁は合志川に面している。その台地の北西端に, 現状の直径約 25 m, 高さ約 4.5 m の円墳, 合志市生坪塚山古墳^{おつぼ}が存在する〔岩谷 1994 : p.12〕(図 2-9, 図 3-4)。戦前に墳頂部が掘り返され, 真赤な石囲みがあったとの証言から, 箱式石棺の存在が想定されている〔隈 1994 : p.65〕。

生坪塚山古墳以外にも, この舌状台地にはいくつかの円墳が存在する。しかし注目されるのは, 圃場整備事業にともなう発掘調査によって, 当墳の東側に広がる台地の北縁沿いで多くの方形周溝墓や円墳が検出されていることである(図 2-10 ~ 13)。なかでも, 円墳の内容には注目すべきものがあるが, それについては後述する。

帯金式甲冑の集中 マロ塚古墳が合志川中流域西半部左岸に所在するとの前提に立つならば, 当該地域における帯金式甲冑の動向には注意すべきである。このことについては本書第 4 部第 2 章の西嶋論文で詳細に検討されているが, ここでも若干触れておきたい。

合志川中流域西半部左岸において, マロ塚古墳のほかに甲冑を出土した古墳には, 合志市上生上ノ原^{うへはる} 4 号墳がある。それは, 高熊古墳の南約 1.1 km, 合志川左岸に流入する上生川の左岸台地上に位置する(図 2-14)。これまで述べてきた古墳が合志川に面する台地北縁に立地していたのに対し, そこは合志川から南へ上生川を少しさかのぼった地点にあたる。

上生上ノ原 4 号墳は, 小規模な円墳で箱式石棺を主体部とする。その石棺の蓋石上で, 三角板鋌留短甲の一部が検出され, また, 眉庇付冑が置かれていたことを示す痕跡が確認された。4 号墳以外では, 2 号墳の箱式石棺墓壇内で鑣轡が検出されたことが注目される〔江本 1994〕。発掘調査報告書が未刊行であるため詳細を記すことはできないが, 当該地域の古墳時代中期を考えるうえで見過ごすことのできない古墳であることは確実である。

合志川下流域に視野を広げると, その左岸にある熊本市植木町慈恩寺経塚古墳^{じおんじ}(図 2-2)からも甲冑が出土している〔中村・倉原 1979〕。西嶋剛広の検討によると, 眉庇付冑片や鍔片, 型式は不明ながら革綴短甲片が存在するという〔西嶋 2010〕。慈恩寺経塚古墳は直径 53 m の大型円墳で, 高

熊古墳の一段階前の首長墳とみなされるから、合志川中流域西半部左岸の古墳動向と合わせて考察すべき存在である。

このように、慈恩寺経塚古墳を含めると、合志川中・下流域には3基の帯金式甲冑出土古墳が知られるが、これは大変注目すべきことである。なぜなら、現在の資料によるかぎり、熊本県地域において、帯金式甲冑が3基以上の古墳から検出されている地域は、合志川中・下流域以外では、緑川中流域と天草北部（三角・大矢野・松島）地域しかないからである。

ここで注意をうながしておきたいのは、古墳時代前期から中期前葉に有力な前方後円墳が築造された宇土半島基部地域、あるいは菊池川下流域とは異なった地域に、帯金式甲冑が多くもたらされている事実である。とくに、合志川中・下流域は、有明海から遠く離れた内陸部である点に細心の注意を払うべきであろう。また、弥生時代の海岸線を復元した佐藤伸二の地図を参考にすると〔佐藤 1998:p.558〕、緑川中流域における中期古墳の築造地も有明海に直接面しない場所である。つまり、有明海を臨む位置を占めることが多かった古墳時代前期から中期前葉の古墳とはあきらかにその立地が異なっているのである。他方、八代海側にある天草北部地域は、これとは逆に八代海という内海の北西側を画する位置にあることが重要であると考えられる〔杉井編 2009〕。

なお、菊池川下流域に所在する^{なごみ}和水町江田船山古墳（図1-16）や玉名市伝左山古墳（図1-14）も、帯金式甲冑が出土していることで著名である。しかし、古墳の立地を詳細にみれば、江田船山古墳は菊池川下流域でもその北半部左岸に広がる台地縁辺に位置しており、有明海を臨んではいない。むしろ、菊池川が玉名平野へ流れ出る地点を強く意識した立地である。また、上述したように、江田船山古墳が所在する清原古墳群は、その南にある椿山古墳の築造と密接に関連しながら造営が開始されたと考えられるが、そこは古墳時代前期には有力な古墳が存在しなかった地域である。他方、伝左山古墳は菊池川下流域でも玉名平野部右岸の微高地上に位置しているが、やはりここでも、それ以前には有力な古墳が築かれていない。つまり、古墳時代前期から中期前葉に有力な古墳が築造されていない地域に帯金式甲冑がもたらされているという状況は、菊池川下流域でもみることができるのである。

方形周溝墓・円墳の群集と馬埋葬 合志川中流域西半部左岸でもう一つ注目すべきなのは、上述した生坪塚山古墳の東に広がる舌状台地上において、方形周溝墓あるいは円墳が古墳時代前期から後期に至るまで連綿と築造されていることである。方形周溝墓が先行し、古墳時代中期中葉頃に円墳に置き換わったと推測される。圃場整備事業によって調査された^{こくりゅう}石立遺跡〔浦田編 1994〕、^{はっ}八反田遺跡〔浦田編 1993・1994〕、^{ぼる}八反原遺跡、^{さこぼる}迫原遺跡〔浦田編 1995〕（いずれも合志市所在）でそうした墳墓の存在が確認されているが（図2-10～13）、おそらく舌状台地の全体に広がるような大規模な墓域が形成されていたと考えられる。

さらに注目されるのは、八反原遺跡で検出されたいくつかの円墳の周溝から馬の歯と馬具が出土し〔江本 1994〕、馬の埋葬の存在がうかがえることである。これは、西嶋剛広が指摘するように、朝鮮半島系渡来文化の一要素として評価できる事象である〔西嶋 2005 : p.86〕。

熊本県地域において、これと同じ様相を示すのは、緑川中流域に所在する熊本市城南町塚原古墳群である（図1-34）。ここでも多くの方形周溝墓や円墳、前方後円墳が検出され、さらには馬の埋葬の存在が確認された。合志川中流域西半部左岸および緑川中流域は、上述したように帯金式甲冑

が多くもたらされている点で共通するが、さらに方形周溝墓や円墳が連綿と築かれる場所を有する点、そしてそこには古墳時代中期中葉に朝鮮半島系渡来文化がいち早く伝播した様子がうかがえる点においても、きわめて高い共通性をみせるのである。

3 合志川中流域西半部左岸周辺の中・後期の古墳

では、合志川中流域西半部左岸の周辺にはどのような古墳が築かれているのだろうか。このことについては、本書第2部第2章第1節の中原幹彦の記述やそこで示された地図に詳細が表されているが、古墳時代中期から後期を中心に、ここでも簡単に整理しておきたい。

合志川下流域左岸 合志川下流域左岸で重要なのは、上でも述べた熊本市植木町慈恩寺経塚古墳である(図2-2)。合志川は、高熊古墳が所在する舌状台地の眼前でその流れを西から北へ変え、菊鹿盆地に向かって北流する。慈恩寺経塚古墳はそうした北流部左岸に広がる台地上に位置しているが、そこはまさに合志川が菊鹿盆地へ流れ出ようとする箇所を眼下に臨む場所なのである。つまり、高熊古墳と同様、合志川をつたうルート上のきわめて重要な地点に立地しているといえる。なお、高熊古墳とは約2.8km離れているが、お互いを見通すことが可能である。

さて、慈恩寺経塚古墳は直径53m、高さ8mの大型円墳である。2段築成で、葺石をもつ〔中原編1995・1996〕。主体部は舟形石棺の直葬であるが、現在、その棺身は引き上げられており、墳頂部でみることができる。当墳の築造時期を考えるうえで重要なのは、壺形埴輪を有する点、そして墳頂の盗掘坑から眉庇付冑および革綴短甲の破片が検出されている点である。また、古墳にともなうことが明確な須恵器が検出されていない点も考慮されるべきであろう。これらの点を総合すれば、高熊古墳より一段階古いTK73型式段階あるいはTK216型式段階に併行する時期の古墳ととらえておくことがもっとも妥当であると考えられる。

そうした場合、慈恩寺経塚古墳は、合志川中・下流域における最初の有力古墳とみなしうる。そして次の段階になると、前方後円墳である高熊古墳が築造され、それには窖窯焼成による精美な円筒埴輪や形象埴輪が樹立されることになるのである。

小野川流域 高熊古墳が所在する舌状台地は、合志川左岸に合流する夏目川によってその北西側を、同じく上生川によってその東側を、そして上生川左岸に合流する小野川によってその南東側を画されている。そうした小河川のなかでも小野川は重要で、これをつたって南へ向かい、分水界を越えると、熊本平野へ流れ出る坪井川の上流域に到達する。つまり、小野川は、北の菊鹿盆地と南の熊本平野を結ぶルートの一部をなしており、さらにその流域にはいくつかの有力な古墳が築かれているのである。

まず、注目されるのは、小野川最上流域の左岸台地上に位置する熊本市植木町鬼塚古墳である(図2-16)。当墳は、2007年度の発掘調査によって、葺石をもつ直径約30mの円墳であることが明らかとなった。また、TK208型式の須恵器大甕や樽形甗などが検出されたことから、高熊古墳とほぼ同時期の古墳であると判断された〔植木町教育委員会生涯学習課2008〕。当墳は、高熊古墳の南西約4kmに位置するが、そのような合志川流域からはやや離れた場所にも、当該時期の須恵器が運び込まれていることを示した点で重要である。

同じ小野川左岸の台地上でも、その中流域に立地するのは熊本市植木町横山古墳である(図

2-17)。墳長約39mの前方後円墳で、前方部を北に向ける。主体部は横穴式石室で、その石室形などには装飾文様が描かれている [上野・桑原1980]。時期は古墳時代後期中葉に位置付けられるから高熊古墳などとは直接関係しないが、当該地域における後期古墳の展開過程を考えるうえで重要な古墳である。

他方、小野川中流域の右岸台地上にある独立丘陵、石川山には熊本市植木町石川山古墳群が存在する (図2-18)。12基の古墳の存在が確認されており、うち1～5号墳は北群、6～12号墳は南群と区分される。2号墳のみが前方後円墳で、墳長は34m、短い前方部を北北東に向ける。その詳細な時期は不明である [田辺ほか1968]。マロ塚古墳を考えるうえで重要なのは、9号墳と8号墳である [中原編1996]。それらはいずれも、検出された須恵器からTK23型式段階の築造であると考えられるが、主体部の形態は異なっていて、9号墳は組合せ式家形石棺直葬、8号墳は石障系横穴式石室である。次のTK47型式段階に位置付けられる7号墳の主体部も石障系横穴式石室であるから、石川山古墳群ではTK23型式段階に横穴式石室という新たな埋葬方式が受容されたとみとめうる。マロ塚古墳出土品全体の編年的位置はTK23型式段階と考えられ、また、そのきわめて良好な遺存状態から、それらは、ある程度の広さが確保され、かつ気密性の高い空間に納められていたと推測できる。つまり、石川山古墳群における横穴式石室の受容時期を考慮すれば、マロ塚古墳出土品が横穴式石室に納められていた可能性も浮上してくるのである。

なお、石川山古墳群は台地上に突起する独立丘陵の尾根筋を中心とした場所に営まれており、しかもそれぞれの古墳は、西の小野川方面ではなく東の台地上面を臨む位置に築かれている。このことは、これまでみてきた合志川中流域西部左岸の古墳が、台地下の河川や平地部を臨むような台地縁辺に立地していたこととはまったく異なっており、注意が必要である。石川山古墳群は一つの独立丘陵を墓域にしたきわめてまとまりの強い古墳群と考えられ、単独で存在する高熊古墳などとは異なった性格を有する可能性が高いのである。

下岩野川最上流域 高熊古墳が位置する舌状台地の北西側を流れるのは夏目川であるが、その上流域の右岸には北流してきた下岩野川が合流している。その下岩野川の上流域に位置するのが、熊本市植木町塚園古墳群である (図2-15)。古墳群のすぐ北には横山という独立丘陵が存在するが、上述した横山古墳はこの横山の東麓に位置している。塚園古墳群との距離は約1kmであるが、お互いを直接視認することはできない。

さて、塚園古墳群では前方後円墳1基、円墳4基の存在が確認されている。前方後円墳である1号墳は、墳長約40mで、前方部を西に向ける。時期などの詳細は不明である [柘元1971]。4・5号墳は道路の拡幅工事の際に発見された [後藤編2002]。うち4号墳は、その周溝からTK23～TK47型式の須恵器が検出されているから、上述の石川山8・9号墳に近い築造時期を想定できる。その主体部は凝灰岩製の石棺である。なお、塚園1号墳は高熊古墳の次に築造された前方後円墳と認識される場合があるが [高木2003]、いかんせんその時期が不明である。4号墳の時期を念頭におけば、そうした可能性を考慮することもできると思われるが、合志川を見下ろす舌状台地の先端に築かれた高熊古墳と、合志川から南に離れた地点にある独立丘陵、横山の南麓に営まれた塚園古墳群とでは、その立地環境の差異があまりにも大きい。そのため、両者を直接の系譜関係で結ぶことには慎重でありたいと考えている。

②……………古墳時代中期における合志川中流域西半部左岸の役割

1 熊本県地域における古墳時代中期の前方後円墳

ここまでのところで合志川中流域西半部左岸およびその周辺における中期古墳の動向を検討してきたが、当該地域における古墳動向の大きな画期は熊本市植木町慈恩寺経塚古墳およびそれに続く高熊古墳の出現にあったとみなしうる。それは古墳時代中期中葉、須恵器陶邑編年ではTK216型式段階を中心とする時期であると判断できる。前方後円墳集成編年（以下では集成編年と記述）〔広瀬1991〕では6期ないし7期に相当する。では、ほかの地域では、この時期にどのような古墳が築造されているのだろうか。

従来の認識 熊本県地域の古墳編年は高木恭二によって精力的に進められている〔高木1984・1990・1995・2000・2003・2008、高木・藏富士1998〕。なかでも藏富士寛と共同で執筆された論考では、集成編年を用いながら古墳動向の画期が明快に示されたが、本稿にかかわる集成編年6・7期については、「6期には前方後円墳の小型化、もしくは大型円墳化と、首長墳の小規模化が進み、次の7期には空白期とすら解することのできる状況を迎えることになる」と評価された〔高木・藏富士1998：pp.69-70〕。高木はその後も古墳編年の見直し作業を幾度か実施しているが、最新の論考に掲載された古墳変遷図〔高木2008：p.136〕をみても、集成編年6・7期に対する認識には大きな変化がないように思われる。

こうした高木・藏富士の見解については、私もかつて無批判のままに引用したことがあったが〔杉井1999：p.40〕、その後の調査、分析を行うなかで、再検討の余地があるのではないかと考えるようになった〔杉井2004：p.3〕。こうした考えに至ったもっとも大きな理由は、高熊古墳が集成編年7期に位置付けられると明確に認識したことにあつた〔西嶋編2004〕。

九州島における中期古墳の編年にかんしては、2007年度開催の第10回九州前方後円墳研究会で再検討が行われたが、その際、木村龍生によって高木・藏富士のものとは異なる新たな見解が示された〔木村2007〕。論点は多々あるが、なかでも注目されるのは、「熊本地域全体を眺めて見ると、集成6期段階は各地域において空白の時代といえる。そして、集成7期前後になるとこれまで、空白だった地域で突如として首長墓が形成され」と述べる点である〔木村2007：p.173〕。つまり、高木・藏富士とは集成編年7期の評価がまったく異なっているのである。

このような見解の相違が生じたのは、両者のあいだで山鹿市岩原双子塚古墳および阿蘇市長目塚古墳のとらえ方が大きく異なっていることに主たる原因がある。次にそれを検討してみよう。

時期を再検討すべき前方後円墳 山鹿市岩原双子塚古墳は、盾形の周溝をもつ墳長約102mの前方後円墳で、熊本県地域では五指に入る規模を誇る。周囲にあるいくつかの円墳とともに岩原古墳群を形成している〔緒方編1982〕。古墳群が位置するのは、菊池川中流域西半部の左岸、菊鹿盆地の西端を画すように南から北へ突出した台地上で、東に広がる菊鹿盆地と西の幅狭い凹部に流れ込む菊池川の双方を見通すことができる場所である（図1-20）。さらに、古墳群が営まれた台地の北側では、南流してきた岩野川が菊池川右岸に合流しており、まさに東西および北からのルートの

結節点に立地している。

さて、高木・藏富士は当初、岩原双子塚古墳を集成編年5期に位置付けていたが〔高木・藏富士1998〕、最新の高木の古墳変遷図では5期と6期の境界線付近におかれている〔高木2008〕。一方、私は、当墳出土の埴輪を根拠に集成編年7期にまで下がる可能性を指摘したことがあった〔杉井2004:p.7〕。木村もこれを受けて集成編年7期前半に位置付けている〔木村2007:p.166〕。未報告資料を用いて議論することに限界を感じるが、私はやはりその埴輪を根拠に、高熊古墳よりも後出する古墳ととらえておきたい。⁽³⁾

阿蘇市長目塚古墳は、阿蘇カルデラの北部、阿蘇谷の平地部に築かれた前方後円墳である。墳長は115 m程度に復元されており〔坂本1962〕、熊本県下最大級の規模を誇る。中通古墳群の中心に位置し、周囲には墳長が約71 mに復元される前方後円墳、上鞍掛塚A古墳をはじめとして、12基以上の円墳が存在したらしい〔乙益1962a〕。しかし、現存するのは前方後円墳と円墳を合わせて10基である〔岩崎・山下編1994〕。

さて、長目塚古墳の時期であるが、高木は一貫して集成編年5期としている〔高木2008など〕。おそらくその根拠は、墳丘に樹立された壺形埴輪と思われる。一方、木村は、前方部石室出土の鉄鏃や墳丘出土の須恵器などの時期を勘案し、集成編年6期後半に位置付けた〔木村2007:p.168〕。木村も述べているが、長目塚古墳の時期を考えるうえで問題となるのは、壺形埴輪のみをみれば中期前葉に位置付けられるという見解〔竹中2004など〕がある一方で、前方部石室は中期中葉以降とみられることから、両者のあいだに大きな時間的隔たりが生じてしまうことであった。

ところが最近、木村やほかの九州古墳時代研究会のメンバーとともに、阿蘇神社に所蔵されている長目塚古墳出土遺物をみる機会を得たが、須恵器はTK216型式とみなせるものであった。また、前方部石室出土鉄鏃の時期もそれに矛盾するものではないと教えられた。須恵器は前方部前端の東斜面と北斜面の数箇所で一群の破片となって検出されたらしいから〔坂本1962:p.28〕、おそらくそれは前方部埋葬の時期を表している可能性が高い。問題は、壺形埴輪をどのようにとらえるべきなのかであるが、私は、慈恩寺経塚古墳を一つの定点として考えてはどうかとの見解をもつに至った。すなわち、慈恩寺経塚古墳を根拠にすれば、熊本県地域において壺形埴輪はTK73～TK216型式段階まで確実に用いられている。つまり、長目塚古墳の壺形埴輪もそれに近い時期とすることが許されるなら、前方部埋葬との時間的懸隔は解消されることになるのである。阿蘇神社所蔵資料をもっと詳細に検討する必要性を感じる⁽⁴⁾が、今はこうした理由により、長目塚古墳を慈恩寺経塚古墳に併行する時期に位置付けておきたいと考える。

古墳時代中期中葉から後葉の古墳動向 以上のように岩原双子塚古墳と長目塚古墳の時期をとらえ直すと、集成編年6～7期、すなわち古墳時代中期中葉を、前方後円墳の築造が低調になる時期とみなすことはできなくなる。むしろ、中期前葉までとは異なった地域において、新たに有力な大型円墳や前方後円墳の築造が開始された時期ととらえられる。それが、合志川中・下流域の慈恩寺経塚古墳や高熊古墳であり、また阿蘇谷の長目塚古墳なのである。また、緑川中流域の熊本市城南町塚原古墳群に築かれた琵琶塚古墳もこれと同様にとらえられよう〔杉井2006a〕。

しかし、次の集成編年7～8期、中期後葉になると、また異なった地域に新たに前方後円墳が出現する。合志川中・下流域にかかわるものでは、菊池川中流域西半部左岸の岩原双子塚古墳、菊池

川下流域北半部左岸の清原古墳群（虚空蔵塚古墳，江田船山古墳）がそれにあたる。また，緑川中流域の塚原古墳群にかかわるものとしては，その南の丘陵を越えた八代平野部北端に築かれた宇城市松橋大塚古墳（図1-35）をあげることができる。さらに，前方後円墳ではないが，八代海の北西側を画す天草北部地域に，円筒埴輪や形象埴輪，帯金式甲冑をもつ上天草市カミノハナ古墳群が営まれ始めたのもTK208（～TK23）型式段階であることを付言しておこう〔杉井編2009〕。

このように，熊本県地域では，古墳時代中期中葉から後葉に新たな地域で有力な前方後円墳，あるいは（大型）円墳の築造が開始されたが，それにはどのような理由があるのだろうか。

2 中期前葉以前の前方後円墳の立地

宇土半島基部地域 古墳時代前期の熊本県地域では，宇土半島基部地域において多くの前方後円墳が築造されたことはよく知られている（図1-7～12）。宇土半島基部地域には，東西の丘陵にはさまれた狭い通路状の平地部が存在し，そこは北に広がる熊本平野と南の八代平野を結ぶ交通の要衝となっている。前期古墳はこうした平地部を見下ろす東西の丘陵上に築かれているのである〔杉井2003〕。

九州島の西側には南北二つの内海世界が存在する。北の有明海沿岸地域と南の八代海沿岸地域であるが，宇土半島基部地域はまさにその境界に位置している。また，青銅器や甕棺といった弥生時代の文化要素の多くが当該地域付近に分布の南限をもっている。つまり，地理的な意味でも，また文化的な意味でも，九州島西側における重要な境界域を形成しているのである。おそらく，こうした点が中央政権に重視されたからこそ，多くの前期古墳がここに築造されたのであろう。

しかし，宇土半島基部地域の前方後円墳のなかには，有明海や八代海を強く意識した立地をなすものも存在する。一つは宇土市天神山古墳で，有明海を臨んでいる。墳長は約107mもあり，その墳形から前期後半の古墳と考えられる〔飯田1996〕。もう一つは宇城市弁天山古墳で，こちらは八代海を臨んでいる。墳長は約54mで，主体部は割石小口積みの竪穴式石室である。出土した土器から前期前半に位置付けられる〔富樫1966〕。これら二つの古墳は，通路状の平地部を見下ろす古墳からは離れて単独で存在する点にも注意を払っておきたい。

八代平野から芦北 ところで，宇土半島基部地域より南の八代平野部およびその東側丘陵上にも，前期後半になって八代市有佐大塚古墳〔富樫1971〕や氷川町大王山1号墳〔乙益1962b〕といった前方後円墳が築造される。また，八代海に浮かぶ大蔵蔵島（今の大蔵蔵山）の頂部には，碧玉製紡錘車などが出土した竪穴式石室を内部主体とする楠木山古墳が存在する〔池田1986〕。さらに，出土古墳は不明ながら，八代平野からその南の芦北にかけての地域で，3面の舶載三角縁神獸鏡が発見されている。それら3面は，福永伸哉による舶載三角縁神獸鏡編年〔福永2005〕のB・C・D段階すべてにわたるものである。このことは，前期前半にも，当該地域に有力な古墳が築造されていた可能性を強く示唆する。

熊本県地域の古墳時代前期にかんしては，これまで宇土半島基部地域の重要性がとくに強調されてきた。しかし，こうした状況を見ると，八代平野から芦北にかけての地域もそれに匹敵する重要な地域とみとめうる。今後，このような視点のもとに埋もれた資料を調査，検討することが必要であるが，ひとまずここでは，八代海を臨む場所に有佐大塚古墳や大王山1号墳，楠木山古墳が立地

していることを確認しておこう。

菊池川下流域 菊池川下流域では、前期後半になって前方後円墳の築造が開始される。菊池川右岸では玉名市院塚古墳〔乙益・田辺・三島・田添 1965〕(図 1-1) および藤光寺古墳〔松本 1992〕(図 1-2)、左岸では山下古墳〔三島・伊藤・内藤・佐藤・田添 1972〕(図 1-4) および天水大塚古墳〔中村安編 2001〕(図 1-3) があるが、それらのうち墳丘規模の大きい藤光寺古墳と天水大塚古墳が有明海を臨む位置に築かれていることに注目しておきたい。

菊池川中流域西半部右岸(岩野川下流域左岸) 菊鹿盆地の西端では、北から流れてきた岩野川が菊池川の右岸に合流している。その岩野川の左岸丘陵上に位置する山鹿市銭亀塚古墳(図 1-19) は、墳長約 65 m の前方後円墳である〔中村幸編 1989〕。主体部は石障系横穴式石室で、その構造から集成編年 5 期の古墳とされることが多い〔古城 2007 など〕。しかし、石室以外の要素が知られていないため、現在の私にはその時期の詳細を検討することは難しい。したがって、当墳の評価は保留しておきたいが、かりに集成編年 5 期頃に位置付けられるとすれば注目すべきことである。なぜなら、上述したように岩原双子塚古墳や長目塚古墳の時期を下げるのが許されるなら、集成編年 5 期頃は、熊本県地域では有力な前方後円墳が目立たなくなる時期ととらえられるからである。つまり、そうした時期に岩野川と菊池川の合流地点を見下ろす位置に当墳が築造された意味が問われなければならないのである。

3 マロ塚古墳出現の背景

ここまでの検討から私が重視したいのは、古墳時代中期前葉までと中期中葉以降とでは前方後円墳の立地が大きく異なる点である。すでに述べたことであるが、中期中葉に有力な前方後円墳が出現する合志川中流域西半部左岸や阿蘇谷、緑川中流域は、有明海に直接面した場所ではない。つまり、有明海を臨む場所に築かれることが比較的多かった中期前葉以前とは、あきらかに前方後円墳の立地環境が異なっているのである。

この理由を考える際に思い出されるのは、福岡県八女地域や筑後川中流域の吉井地域である。いずれも有明海からは相当の距離がある内陸に位置し、また、中期中葉になって有力な前方後円墳の築造が開始された地域である。八女地域では広川町石人山古墳、吉井地域ではうきは市月岡古墳がそれにあたり、どちらも集成編年 6 期に位置付けられる。

吉井地域は筑後川をつたって日田盆地に抜けるルートの要衝であるが、さらに筑後川をさかのぼり阿蘇外輪山を越えると阿蘇谷に到達する。また、日田盆地から東へ向かうと、別府湾沿岸あるいは周防灘沿岸に達する。一方、八女地域からは^{へばる}迎春川を南へさかのぼり、小栗峠を越えると岩野川の上流域に達する。そして、岩野川を下れば菊鹿盆地西端部に到達するのである。

また、先にも述べたように、合志川中流域西半部左岸は菊鹿盆地から熊本平野へ抜けるルート上に位置する。そして、熊本平野からは、平野東部の低位段丘沿いを南へ下ると、途中、嘉島町井寺古墳(図 1-32) あるいは御船町小坂大塚古墳(図 1-33) が立地する微高地を経て、塚原古墳群(図 1-34) に到達することができる。

このように、古墳時代中期中葉に前方後円墳が新たに築造された地域は、河川づたいに進む内陸ルートの最重要地点であるといえる。そうした地域に、帯金式甲冑や窖窯焼成による精美な埴輪、

あるいは朝鮮半島系渡来文化などが優先的にもたらされたのである。

こうしたことから想像されるのは、古墳時代中期中葉の有明海沿岸地域では、海岸沿いのルート以上に、河川づたいの内陸ルートが重視された可能性である。そして、甲冑や埴輪などの動向をみれば、こうした動きには、古市・百舌鳥古墳群を造営した中央政権が密接にかかわっていた可能性がきわめて高いと判断される。つまり、これまでとは異なった地域の在地勢力と新たな関係を取り結びながら、地方との政治・経済関係を発展させようとした中央政権側の意図がかいまみえるのである。その現れの一つが、新たな交通ルートの整備であったと思われるのである。

他方、天草北部地域の古墳動向から判断すれば、八代海沿岸地域では、九州島側の海岸沿いを下るルートのほかに、天草諸島を南北につたうルートが今まで以上に重視された様子がうかがえる。こうした状況は、古墳時代後期になるとよりいっそう明瞭になる〔杉井2009〕。ただし、有明海沿岸地域に比べて、八代海沿岸地域では東の九州島側と西の天草諸島側との一体性は十分に保たれていたように思われる。

いずれにしろ、熊本県地域では、古墳時代中期中葉に新たな交通ルートが整備された可能性がきわめて高い。マロ塚古墳が築かれた合志川中流域西半部左岸は、そうした新たなルートの最重要地点の一つであった。マロ塚古墳に多くの帯金式甲冑や鉄製武器が副葬されていた理由の一端は、まさにここにあると思われるのである。

おわりに

マロ塚古墳出土遺物に含まれる甲冑のうち、冑と頸甲は3点ずつである。しかし、短甲は1点しかなく、肩甲に至っては破片ばかりである。そのため、発見時にすべての遺物が回収された可能性はきわめて低く、おそらく今も、現地にそのまま残されていると思われる。したがって、今後、合志川中流域西半部左岸の古墳をたんねんに調査していけば、現有の資料と接合する破片が発見される可能性は高い。そうなったとき初めて、接合資料が発見された古墳こそが真のマロ塚古墳と認定されよう。しかし今は、きわめて断片的な情報を頼りに、マロ塚古墳が所在したであろう地域を想定することで満足せざるを得ない。

本稿では、そうしたあいまいな状況にあることを承知したうえで論を展開した。しかし、万一、マロ塚古墳の所在地がまったく別の地域であったとしても、古墳時代中期中葉における合志川中流域西半部左岸の重要性は変わらないだろう。

今後も、合志川流域における古墳動向を注意深く検討していきたいと考えている。

註

- (1)——椿山古墳の埴輪は未発表資料であるが、本稿で言及することについて和永町教育委員会の益永浩仁氏から許可を得た。
- (2)——有佐大塚古墳の円筒埴輪は畿内地域のものと同じ技術体系のなかでとらえうるものであるが、その位置付けについては別稿において果たしたい。
- (3)——岩原双子塚古墳は、その規模だけから判断しても、きわめて重要な古墳であることは明らかである。周辺の円墳を含めた築造時期などの検討は、別の機会に行いたいと考えている。
- (4)——長目塚古墳出土遺物の再整理作業を2010年に開始した。数年後にその成果を公表する計画である。

引用・参考文献

- 飯田考俊 1996 「天神山古墳測量調査報告」『宇土市史研究』第17号、宇土市史研究会・宇土市教育委員会、pp.94-110
- 池田栄史 1986 「八代市鼠蔵古墳群の研究」『九州考古学』第60号、九州考古学会、pp.93-112
- 岩崎充宏・山下志保編 1994 「中通古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集、熊本大学文学部考古学研究室、pp.1-30
- 江本 直 1995 「西合志町の古墳時代」『西合志町史』通史編、西合志町、pp.195-204
- 緒方 勉編 1982 「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」、熊本県文化財調査報告第55集、熊本県教育委員会
- 乙益重隆 1962a 「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会、pp.41-70
- 乙益重隆 1962b 「熊本県八代郡大王山古墳」『日本考古学年報』11（昭和33年度）、日本考古学協会、pp.130-131
- 乙益重隆・田辺哲夫・三島格・田添夏喜 1965 「院塚古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第6集（玉名地方）、熊本県教育委員会、pp.1-32
- 加藤一郎 2008a 「九州南部における埴輪の伝播と受容—唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて—」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』、鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3、鹿児島大学総合研究博物館、pp.233-242
- 加藤一郎 2008b 「大山古墳の円筒埴輪—竈窯焼成導入以後における百舌鳥古墳群の円筒埴輪—」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）〕研究成果報告書、奈良大学文学部文化財学科、pp.491-514
- 木村龍生 2007 「中九州における中期中古墳の編年」『九州島における中期中古墳の再検討』、第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集、九州前方後円墳研究会、pp.161-181
- 隈 昭志 1981 「古墳時代」『植木町史』、植木町、pp.63-100
- 隈 昭志 1992 「肥後」『前方後円墳集成』九州編、山川出版社、pp.65-69
- 甲元真之 1995 「古墳時代首長系譜の類型化—九州での事例的考察—」『西谷眞治先生古稀記念論文集』、勉誠社、pp.119-141
- 坂本経堯 1962 「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会、pp.1-40
- 坂本経堯 1965 「古墳時代」『泗水町史』、菊池郡泗水町役場、pp.12-15
- 佐藤伸二 1998 「金石併用の文化—弥生文化—」『新熊本市史』通史編第1巻、自然・原始・古代、熊本市、pp.503-604
- 杉井 健 1999 「墓制と生活様式の共通圏の形成」『古墳時代首長系譜の変動パターン—の比較研究』、平成8～10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書、大阪大学文学部、pp.35-46
- 杉井 健 2003 「宇土半島基部における古墳文化のはじまり」『新宇土市史』通史編第1巻、自然・原始・古代、宇土市、pp.445-471
- 杉井 健 2004 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長系譜変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』、平成13～平成15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科、pp.3-26
- 杉井 健 2006a 「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』第89号、熊本大学文学部、pp.1-27
- 杉井 健 2006b 「熊本大学所蔵の熊本県宇土市轟貝塚出土円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第10号、埴輪研究会、pp.145-150

-
- 杉井 健 2009 「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』, 平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書, 熊本大学文学部, pp.231-238
- 杉井 健編 2009 『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』, 平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書, 熊本大学文学部
- 高木恭二 1984 「熊本県」『古代学研究』102, 特集 各地域における最後の前方後円墳 西日本 I, 古代学研究会, pp.15-17
- 高木恭二 1990 「西部(佐賀・熊本)」『古墳時代の研究』第10巻, 地域の古墳 I 西日本, 雄山閣, pp.30-41
- 高木恭二 1995 「肥後」『全国古墳編年集成』, 雄山閣, pp.16-17
- 高木恭二 2000 「肥後における首長墓の変遷」『継体大王と6世紀の九州—磐井の乱前後の列島情勢に関連して—』, 熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集, 熊本古墳研究会, p.129
- 高木恭二 2003 「熊本における古墳の動向」『新宇土市史』通史編第1巻, 自然・原始古代, 宇土市, pp.437-444
- 高木恭二 2008 「石棺から見た古墳時代の九州」『火の君, 海を征く! ~古墳からみたヤマトと八代~』, 平成20年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化18, 八代市立博物館未来の森ミュージアム, pp.126-141
- 高木恭二・藏富士寛 1998 「肥後における古墳文化の特質—筑後八女古墳群との比較—」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』, 第1回九州前方後円墳研究会発表要旨・見学会資料, 九州前方後円墳研究会, pp.69-84
- 竹中克繁 2003a 「円筒埴輪の地域性—熊本県地域の埴輪—」『先史学・考古学論究』IV, 龍田考古会, pp.85-100
- 竹中克繁 2003b 「九州における埴輪生産の受容と展開」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』, 第52回埋蔵文化財研究会発表要旨集, 埋蔵文化財研究会, pp.235-254
- 竹中克繁 2004 「九州壺形埴輪研究序論—壺形埴輪の変遷とその意義—」『熊本古墳研究』第2号, 熊本古墳研究会, pp.13-32
- 竹中克繁 2008 「王陵系埴輪『地域受容』の一類型—古墳時代中期における南九州の埴輪生産—」『古代文化』第59巻第4号, 古代学協会, pp.94-103
- 檀 佳克 2006 「有明海沿岸地域における前期古墳の動向」『前期古墳の再検討』, 第9回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨・資料集, 九州前方後円墳研究会, pp.195-218
- 鶴嶋俊彦 1997 「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号, 古代交通研究会, pp.39-66
- 富樫卯三郎 1966 「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴石室墳—」『熊本史学』第30号, 熊本史学会, pp.57-66
- 富樫卯三郎 1971 「熊本県鏡町大塚古墳存在の1証—有佐貝塚上発見の埴輪円筒底部—」『古代学研究』第62号, 古代学研究会, p.18
- 富田紘一 2001 「泗水町と古墳時代」『泗水町史』上巻, 泗水町教育委員会, pp.128-162
- 中原幹彦 2002 「遺跡の概要」『石川遺跡』, 植木町文化財調査報告書第14集, 植木町教育委員会, pp.24-27
- 中原幹彦 2007 「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論—古墳時代後期集落成立の背景—」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』, 石棺文化研究会, pp.168-179
- 中村幸史郎編 1989 『錢亀塚古墳ほか』, 山鹿市立博物館調査報告書第9集, 山鹿市教育委員会
- 中村安宏編 2001 『大塚古墳—熊本県指定史跡「大塚古墳」の史跡整備に伴う確認調査—』天水町文化財調査報告書第2集, 天水町教育委員会
- 中村幸弘 1998 「菊池川流域における主要古墳の動向」『肥後考古』第11号, 肥後考古学会, pp.67-80
- 西嶋剛広 2005 「肥後地域における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』, 第8回九州前方後円墳研究会発表要旨集・資料集, 第8回九州前方後円墳研究会実行委員会, pp.86-97
- 西嶋剛広 2010 「慈恩寺経塚古墳の検討」『先史学・考古学論究』V, 甲元眞之先生退任記念, 龍田考古会, pp.619-632
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編, 山川出版社, pp.24-26
- 福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』, 大阪大学出版会
- 藤本貴仁 2008 「中九州(肥後地域)の後期古墳」『後期古墳の再検討』, 第11回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨・資料集, 九州前方後円墳研究会, pp.197-216
- 古城史雄 2007 「肥後の横穴式石室について」『日本考古学協会2007年度熊本大会研究発表資料集』, 日本考古学協会2007年度熊本大会実行委員会, pp.35-55
-

- 松本健郎 1992「藤光寺古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社, p.279
- 三島格・伊藤奎二・内藤芳篤・佐藤伸二・田添夏喜 1972「山下古墳調査概報—玉名市山部田字山下一」『熊本史学』第50号, 熊本史学会, pp.1-17
- 宮崎敬士 1995「肥後における前方後円墳の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』発表要旨資料, 九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会, pp.110-121
- 吉田正一 2001「古墳」『泗水町史』下巻, 泗水町教育委員会, pp.238-243

合志川中・下流域左岸周辺の古墳と遺跡関連文献

[合志川下流域左岸]

慈恩寺経塚古墳

- 中村幸史郎・倉原謙治編 1979『慈恩寺経塚古墳—熊本県鹿本郡植木町大字米塚所在・古墳の調査—』, 植木町教育委員会
- 中原幹彦編 1995『慈恩寺経塚古墳』Ⅱ, 植木町文化財調査報告書第4集, 植木町教育委員会
- 中原幹彦編 1996『慈恩寺経塚古墳』Ⅲ, 植木町文化財調査報告書第5集, 植木町教育委員会
- 西嶋剛広 2010「慈恩寺経塚古墳の検討」『先史学・考古学論究』V, 甲元眞之先生退任記念, 龍田考古会, pp.619-632

[合志川中流域西部左岸]

高熊古墳

- 田辺哲夫 1964「高熊古墳調査報告(その1)」『玉名高校考古学部部報』第7号, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.1-11
- 田辺哲夫 1967「高熊古墳調査報告(続)」『玉名高校考古学部部報』第18号第2部, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.1-12
- 西嶋剛広編 2004「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究室報告』第39集, 熊本大学文学部考古学研究室, pp.1-20

高熊2号墳

- 杉井健・檀佳克編 2003「Ⅲ 高熊2号墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, pp.1-8

上生上ノ原4号墳

- 江本 直 1994「上生上野原遺跡」『西合志町史』資料編, 西合志町, pp.58・82-84・114-131
- 片山祐介 2006「林畔1号墳出土短甲について—定型短甲の型式学的再検討—」『長野県考古学会誌』113, 長野県考古学会, pp.17-40

長塚古墳

- 田辺哲夫 1964「高熊古墳調査報告(その1)」『玉名高校考古学部部報』第7号, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.1-11
- 富田紘一 2001「泗水町と古墳時代」『泗水町史』上巻, 泗水町教育委員会, pp.128-162

宮ノ迫古墳

- 田辺哲夫 1964「高熊古墳調査報告(その1)」『玉名高校考古学部部報』第7号, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.1-11
- 隈 昭志 1981「古墳時代」『植木町史』, 植木町, pp.63-100
- 富田紘一 2001「泗水町と古墳時代」『泗水町史』上巻, 泗水町教育委員会, pp.128-162

アブミ塚古墳群

- 富田紘一 2001「泗水町と古墳時代」『泗水町史』上巻, 泗水町教育委員会, pp.128-162
- 吉田正一 2001「古墳」『泗水町史』下巻, 泗水町教育委員会, pp.238-243

黒松古墳群

- 山下志保編 1994「黒松古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集, 熊本大学文学部考古学研究室, pp.1-16

生坪塚山古墳

- 岩谷史記 1994「生坪塚山古墳」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集, 熊本大学文学部考古学研究室, pp.12-14

-
- 江本 直 1994「生坪塚山古墳」『西合志町史』資料編, 西合志町, pp.53・139
隈 昭志 1994「大塚古墳(塚山古墳)」『西合志町史』資料編, 西合志町, pp.63-65
- 八反原遺跡
江本 直 1994「八反原遺跡」『西合志町史』資料編, 西合志町, pp.54-55・141
西嶋剛広 2005「八反原遺跡」『九州における渡来人の受容と展開』, 第8回九州前方後円墳研究会発表要旨集・資料集, 第8回九州前方後円墳研究会実行委員会, p.419
- 八反田遺跡・石立遺跡・迫原遺跡
浦田信智編 1993『八反田 A・B 遺跡 八反畑遺跡』, 西合志町文化財調査報告第3集, 西合志町教育委員会
浦田信智編 1994『石立遺跡 八反田 C 遺跡』, 西合志町文化財調査報告第4集, 西合志町教育委員会
浦田信智編 1995『迫原遺跡』, 西合志町文化財調査報告第5集, 西合志町教育委員会
- [小野川流域左岸]
鬼塚古墳
植木町教育委員会生涯学習課 2008「報道発表資料 植木町鬼塚古墳発掘調査の成果概要—謎のマロ塚古墳か?—」
横山古墳
上野辰男・桑原憲彰 1980「付2 横山古墳」『清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓』, 熊本県文化財調査報告第41集, 熊本県教育委員会, pp.付4-12
- [小野川流域右岸]
石川山古墳群
田辺哲夫・原口長之・隈昭志・平岡勝昭・緒方勉・桑原憲彰 1968「石川山古墳群調査報告」『熊本県文化財調査報告』第9集, 熊本県教育委員会, pp.1-37
中原幹彦編 1996『石川山古墳群』Ⅱ, 植木町文化財調査報告書第8集, 植木町教育委員会
- [下岩野川最上流域]
塚園古墳群
榎元義一 1971「塚園前方後円墳」『部報』Vol.6, 熊本県立第二高等学校考古学部, pp.7-8
村里憲一 1973「塚園古墳群測量調査報告」『玉高考古学部部報』30号, 熊本県立玉名高等学校考古学部, pp.19-22
後藤貴美子編 2002『平松遺跡・塚園古墳群—一般県道原植木線緊急地方道路整備工事に伴う埋蔵文化財調査—』, 熊本県文化財調査報告第208集, 熊本県教育委員会

(熊本大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)

The Background to the Appearance of the *Marozuka* Tomb

SUGII Takeshi

Extremely well preserved armor, iron arrowheads, and the like have been recovered from the *Marozuka* Tomb. However, the tomb's precise location still remains unknown. The most likely candidate location is the left bank of the western half of the Kōshi River middle watershed, which is a tributary of the Kikuchi River running through northern Kumamoto.

There are several noteworthy features on the left bank of the western half of the middle Kōshi River. First, the haniwa of the first keyhole-shaped tumulus in the area (Takakuma Kofun) are of great finesse, and are a product of the same technological system as the *haniwa* of the Kinki area (the central government). Second, if the lower Kōshi River watershed is also included, there are three tumuli from which *obigane-shiki* (laminar) armor has been found. Third, the construction of large round tumuli was concentrated in that area in the middle Kofun Period. Fourth, tumuli were constructed here without interruption from the early to late Kofun Period, and among them there are some graves with horse burials, a feature of imported Korean peninsula culture.

These features demonstrate that this area had a close relationship with the central government in the middle part of the mid-Kofun Period. Similar trends can be observed in the north Aso caldera and the Midori River middle watershed in Kumamoto Prefecture, the Yame region and Yoshii region in the Chikugo River middle watershed of Fukuoka Prefecture, and elsewhere. A lack of any prior powerful tumuli is common to these locations. Another common feature is the interior land routes not directly facing the Ariake Sea. I point out here that in the middle part of the mid-Kofun Period, interior land routes following the rivers in the Ariake Sea coastal area were seen as of great importance, and I also note the possibility that they were newly prepared according to the intentions of the central government.

The left bank of the western half of the Kōshi River middle watershed is a strategic point on the interior land route linking the Kikka basin, in the Kikuchi River watershed, with the Kumamoto plains in the south, and this is one reason why such an abundance of arms and armor is found as grave goods in the *Marozuka* Tomb.

Keywords: *Marozuka* Tomb, Kōshi River middle watershed in Kumamoto Prefecture, central government, middle part of the mid-Kofun Period, interior land route